巻頭特集❻

ベンガルの地域類型論の構築に向けて

谷口晉吉

1　はじめに

私は植民地期北部ベンガルの地域研究を行ってきたが、そこにおいては通説的なインド村落共同体・カースト論的社会像では捉える事の難しい社会関係が展開しており、通説に対して強い違和感を感じてきた。本発表の目的は、私の抱えるこの違和感を解消するためには、どのようなベンガル歴史像を構想したらよいのかという課題に応えるための一つの準備作業として、19世紀後半から20世紀前半という比較的に史料が多く残されている時期のベンガル農業社会の地域類型論を社会集団分布という視角から考察することにある[1]。

もう一つ、私がこの考察を試みる理由がある。それは、植民地期ベンガル農業社会に関して［Ratnalekha Ray 1979］が提起した富農論（ベンガル農業社会の支配者はjotedarと呼ばれる富農であるとする主張）を巡る論争に関わる［谷口晉吉 2003］[2]。私は、Rayとほぼ同時期にカルカッタ大学に提出した博士論文（1977）において、Rayとは全く別個に、北ベンガルにおける富農経営の優位という結論に到達しており、ベンガル農業社会の基本性格に関わるこの論争に参加した。だが、論争を更に深める為には、北ベンガル以外のベンガル諸地域の農業社会構造を把握する必要がある。これが、ベンガル地域類型論を研究するもう一つのきっかけとなったのである。

以上の二つの課題に応えるべく、まず、第２節では、センサス・データを用いて、植民地期ベンガル農業社会における社会諸集団（jati）の地域的分布の特徴を考察する。そして、第３節では、［Rajat Datta 2000］や［Sugata Bose 1986］らが最も典型的な小農地帯であるとした東ベン

ガルの南部３県について、土地制度を含めたより広い視角に立った考察を行う。そして、第４節においては、このような地域類型を変化させる諸契機を一瞥する。

２　植民地期ベンガルにおける社会集団（jati）の地域的分布

1872年人口センサスを用いて、ベンガル州における県（district）レヴェルの社会集団分布（ジャーティ）の地域特徴を述べよう。但し、別論文［谷口晋吉 2013］において同様の作業を既に行っているので、ここではその結論を簡略に述べるに留める。関連の地図や統計表は、上記論文を参照されたい。

１　ベンガルにおける社会集団の地域的分布には幾つかの特徴がある。バラモンや職能・技能集団の中には、ほぼ満遍なくベンガル各地に展開しているものがあるが、他方、少数の県に分布が限定される社会集団がある。後者は、ベンガルの東端（ミャンマーとの国境地帯）、北端（ヒマラヤ山麓地帯）、西端（ビハール、オリッサとの境界地帯）、南端（ベンガル湾岸の森林地帯）など周辺部や中央部の低湿地帯や丘陵森林地帯に多くみられる。

２　大規模社会集団の中には、ラージバンシrajbamsiやナマスードラnamasudra（またはチャンダーラchandala）などのように、その内部に多くの職能・技能集団（準カーストと呼ばれることもある）を持つものがある。彼らは通常はカーストとして扱われるが、ヒンドゥ的社会分業体制から相対的に独立した独自の生活スタイルと自足的生活基盤をもち、経済的独立性をかなり遅い時期まで保持していたといえる。

３　ベンガルの最大規模カーストの内でラージバンシ、ナマスードラ、カイバルタkaibarta、バグディbagdi、サドゴープsadgopなどは、地域分布に明瞭な偏りがあり、かつ、相互に棲み分けを行っていた。これら大規模社会集団の多くは部族集団を母体とし、過去において地方王国を樹立し領域支配を行ったが、サドゴープを除いて、バラモン的身分秩序においては下層、最下層に貶められている。

これらの諸点は、インド村共同体論に基づくカースト理解では説明困難な現象であるが、ベンガル社会の特徴と歴史的成り立ちを解明する上で重要な手掛かりを与える。言うまでもなく、社会集団の分布の偏りは、ベンガルの地域類型論の重要な指標の一つとなる。

3　植民地期ベンガルの農業社会構造の類型
――東ベンガル3県の考察――

ここでは、既発表の４本の論文［谷口晉吉 2002-2005］に基づいて、東ベンガル３県の農村社会構造を、各県内の地域類型、社会集団分布、土地制度という３つの視角から概観する。その際、各地域の農民層の存在状況に特に注意を払いたい。その他の諸要因を含めた詳細や地域類型の地図については、本節の根拠となる諸論文を参照願いたい。

3-1　Bakarganj県（以下、B県）

Ｂ県は、２つの地域類型に分かれる。第Ⅰ地域は県北と県西北であり、古い沖積平野で早くから開発が進んでおり、第Ⅱ地域は県東、県西南、県南であり、ガンジス、ブラフマプトラ、メグナの大河がベンガル湾に注ぎ込む最南端の河口の新しい沖積地、中洲、島からなり縦横に水路が走る。

県全体では、68％がムスリム、31％がヒンドゥであるが、ヒンドゥは古くからの定住地帯である県北、県西北（第Ⅰ地域）に多くその42％弱を占め、他方、ムスリムは新開発地帯の南部、東部（第Ⅱ地域）に多くその81％弱を占める。中でも河口の巨大な中洲島は圧倒的にムスリム人口が多くその85％強を占める。中洲の開発者は殆どがムスリムであり、これがムスリムの高い人口成長率をもたらした。しかし、ヒンドゥ地主が隣県からヒンドゥ農民を呼び寄せて入植させた場合もある。

この県のヒンドゥの中では、バラモン的社会序列で最下層に位置付けられるナマスードラが45％を占め最大のカーストをなすが、他方で最上位に位置する３カースト（バラモン、バイディヤbaidya、カーヤスタkayastha）も20％を占める。上位カーストはダッカ県とファリドプル県に跨る旧ビクランプルBikrampur郡から入植した人々であり、その80～90％が第Ⅰ地域に集住し、県内の地主、借地権者（中間地主）、役人、法曹、事務職のほとんどを独占している。第Ⅰ地域では、上位３カーストが人口の10％内外を占めるが、第Ⅱ地域ではおよそ２％に過ぎない。興味深いのは上位３カーストの集中度の高い地区には同時にヒンドゥの職能カースト、サービス・カーストの高い集中がみられることであり、そ

こではヒンドゥ的社会分業体制が成立していたと思われる。ナマスードラは県北に集中しているが、彼らの住む場所は肥沃な農耕地帯ではなく、沼沢地帯である。彼らの内部に８つの職業集団があり、相互の社会的交流は殆どないと報告されている。彼らは漁業、農業を行う者が多いが、25％は農業労働者である。

植民地期ベンガルの土地制度の最上位には、政府が直接に認定した所有権（proprietary right）がある。そして、所有者（proprietor）は、自らの権利内容を超えない限りにおいて、様々な借地権（tenure）を創設することができる。借地権は地代取得を目的として保有されるものであり、耕作することを目的とする小作権（tenancy）とは区別される。借地権と小作権の区別は、一般的には面積が100エーカーを超えるか否かを基準とするが、地域慣行が尊重されるので、実際には地域的に多様である。現地用語では、所有権者はzamindarやtalukdar、借地権者（tenure holder）はpatnidarやhaoladar、小作権者（tenant）はraiyatなどであるが、それぞれ、地主、中間地主、農民と呼ぶことが出来る。

Ｂ県は、1793年の永久地租査定時には多くの未開地を含み、特に、県南の森林地帯（スンダルバン。県面積の20％）はほとんど手つかずの状況にあり、所有者に該当する者が存在しなかったので永久査定が行えず、一時査定地とされた。所有者が確定された永久地租査定地は2659の零細地所に分かれた。零細地所の大半は県北、県西北に集中し、さらに各地所は多くの共同持分権（共同経営を維持しつつ、権利のみを分割したもの）に分かれた。この県の地主の多くは不在地主であり、管理人を置いて、地所の一部を農民に小作させ、残りは借地権者に借地に出した。しばしば借地権は世襲・譲渡・分割可能であった。この県では豊かな農民が地主に礼金を払って借地権を得たり、借地の持分権を購入する場合が少なからずあった。また、新開発地の多い県南、県東では、上層農民は保有地の一部を自耕し、残りを又小作に出していたので、地籍確定事業で、彼らは小作人ではなく借地権者として登録された。これらの農民的借地権者（富農）は当然に在村者であったし、その他の非農民の中間地主（郷紳bhadralok）も在村者である場合が多かった。こうして、借地権者数は３万9000名弱という膨大な数に上った。地主はその下に借地権を、また、借地権者は下位の借地権を何層にもわたって創出したので、Ｂ県では、非常に複雑で高度に重層化した土地制度が出現した。

これらを合わせた総借地面積は民間地所の76％に達し、農民が直接に地主から得た小作地は14％に過ぎない。

3-2　Faridpur県（以下、F県）

F県は、3地域類型に分かれる。第Ⅰ地域は県北西の古い沖積層地域であり、早くから開発と定住が進んだ。第Ⅱ地域は県南の沼沢地域である。第Ⅲ地域は県南東の新堆積地域であり、縦横に水路が走る肥沃な土地である。大河に囲まれた肥沃な土地と多くの沼沢地は20世紀初頭までに大半が耕地化され、F県には多様性豊かな農業が育まれ、飢饉が生じることはなかった。

F県人口の6割はムスリムであるが、第Ⅱ地域ではヒンドゥが人口の7割を占める。ムスリムにも差別を受ける11集団がおり、その3分の2は織工である。ヒンドゥの45％はナマスードラであり、特に第Ⅱ地域ではヒンドゥ人口の実に69％を彼らが占めた。彼らはかつてDhaka一帯の支配者であったが、バラモンに呪いをかけられガンジス南岸の沼沢地帯に逃れたという伝承がある。上位3カーストは、ヒンドゥ人口の20％弱を占め、この県の郷紳を構成する。第Ⅲ地域の南部は、ヒンドゥ上位カーストの集住地として有名な旧ビクランプル郡の一部をなし、上位カーストが多数居住した。この結果、この一帯にF県の上位カーストの48％が集中し、同時に、各種職能カーストが高い密度で定住した。この状況は、B県の第Ⅰ地域と共通する。上位カーストの郷紳層が集住する地域にはナマスードラが少なく、郷紳の土地を耕作する農民の大半がムスリムであるのは注目される。中洲地帯はジュート栽培に適し、19世紀末から新生の中洲を求めてムスリムが多数流入し、1平方マイル当たり人口でみると、1881年488名、1901年779名、1921年1201名という極めて早い速度で人口が増加し、20世紀初頭には人口密度において県内最高となった。

この県の土地制度を概観しよう。ここはB県よりも早くから開発された。その開発過程で多数の郷紳やその他の開発主からなる地主・中間地主層が形成され、その下で実際に耕作を行う小作人の多くは定住農民、占有農民の地位を得て、安定的な小作権を享受している。従って、その限りにおいて、多くの農民は自立小農と呼ぶに相応しく、Sugata Boseらの主張する東ベンガル小農経済論が妥当する。なお、全地所面積の55％

に借地権が設定されている。

しかし、仔細にF県地籍確定事業報告書を読み込むと、農地の7.1%を刈分小作人が耕作しており、更に、農民の下で小作をする従属農民（又小作人）が10.3%を耕すから、合計17.3%の農地の耕作は不安定な保有条件下にある。中洲と沼沢が多く、新開発地が大きな部分を占める第III地域ではこの合計は9.1%と低いが、古い開発地である第I地域では27.5%であり、さらに、幾つかのタナ（警察区）では30%を超している。しかも、これら以外に、1年契約刈分小作人が広範に存在するが、彼らに関しては地籍確定調査では捕捉することさえできない。また、F県のエーカー当たり平均地代をみると、従属農民は3-12-3ルピーであり、定住農民の2-9-2ルピーより46%も高く、さらに、刈分小作人の現物地代は貨幣換算すれば14ルピーという法外な高さになる。こうして、下層農民は明らかに高率地代を負担させられている。

ムスリム農民、ヒンドゥ農民のいずれも均分相続制に従うことを考慮すれば、定住農民、占有農民の間にも、開発が進み未開地が減少するにつれ、農地保有規模において無視できない格差が生じたと思われる。上層農民は富農というべき存在になったであろうし、下層農民は貧農、零細農となり刈分小作、又小作を並行して行ったと考えることが自然である。すなわち、十分な規模の未開地が存在する新開発地帯では比較的に多くの自立小農が存在したとしても、やがて開発が進み未開発地が縮小し新規開発が困難になるにつれ、農民内部の階層化が進行するのは、当然の帰結である。実際、19世紀末までにB県の耕作可能な土地の80%が耕地化されていた。さらに留意しなくてはならないのは、在村郷紳層の地所経営形態である。かれらは上位カーストに属し、国家や大地主から開発目的の借地権を与えられ開発を促進する開発主であったが、均分相続制度の下では、時間の経過と共に郷紳の平均借地規模は零細化した。彼らは、自ら犂耕することは殆どないから、その零細な借地は、労働者を雇って直接経営するか、農民や刈分小作人に小作に出された。従って、郷紳達の経営形態は、北部ベンガルの富農経営にきわめて近かったのである。この事情は、B県、D県でも同様である。

3-3　Dhaka県（以下、D県）

D県は4地域類型からなる。第I地域は県西であり、河川活動が活発

であるが、パドマ河の沈殿物により流路が遮られ滞留水が生じ、疫病が発生しやすい。第II地域は県北であり、広大な森林と丘陵地帯があり、土壌は固い粘土質からなる。地高が高いので氾濫水ではなく天水による農業が行われる。第III地域は県東であり、ブラフマプトラ河の活発な造陸活動による肥沃な中洲を含む。第IV地域は県南であり、ガンジスとブラフマプトラが交差し、かつての州都ダッカDhakaの後背地帯をなす。

この県の社会諸集団の分布をみる。ヒンドゥとムスリムの人口比をみると、県全体の構成比は37.1％対62.9％である。第Ⅰ地域は36.8％対63.2％と県平均にほぼ近く、第II地域は41.6％対58.4％である。しかし、第III地域は75.7％がムスリムであるのに対し、第IV地域では両者は拮抗（45.7％対54.3％）している。第III地域でも北東ではムスリムが更に多く、81％を占める。これは中洲地帯の開発の大部分はムスリムによってなされたという通説を支持する事実と言える。第IV地域は、ヒンドゥ王国時代に上位カーストが集住したという歴史的経緯が人口構成に反映していると言えるだろう。

東ベンガルでは、ムスリム人口はごく少数の上層ムスリム（ムスリム人口の１％弱）と、95％を占める下層ムスリムに分かれる。前者は地主や役人であり、後者は農業やその他の肉体労働を行い、両者の間には社会的な溝がある。さらにその下に、10 ～ 15の被差別ムスリム集団がいる。彼らはムスリム人口の４％ほどを占め、ヒンドゥ社会において不浄とされる各種職業に従事する。彼らの中では織工が79％を占め、次いで、搾油業者が10％ほどをなす。被差別ムスリムと他のムスリムとの通婚は行われず、彼らは閉鎖的内婚集団をなす。上層ムスリムは都市に住み、第I、第II地域にその85％が集中する。被差別ムスリムの分布にも強い偏りがあり、第I地域の特定のタナに集中する傾向がみられる。

ヒンドゥ人口は、上位カースト、浄カースト（ナバサクnabasakhと呼ばれる９カースト）、不浄カーストに分かれる。商人カーストはバニクbanikと呼ばれ、元来は単一集団であったが、従事する職業に応じて香料、真鍮、貝リング、布、金細工の５集団に分かれた。この内、金細工商人は不浄カーストとされるが、他の４種のバニクは浄カーストに属す［Raukin 1901: para.26］。

ナマスードラは、D県ヒンドゥの24.2％を占める最大集団であり、県全体に分布するが、特に第II地域北部、および、第Ⅰ地域南部で集中度

が高い。多くは農民だが、船頭、駕籠かき、運送人、庭師などにも従事する。彼らの内部に少なくとも７つの準カーストがあり、耕作者、大工、漁師、魚屋、奴隷、駕籠かきなどの職業に従事し、食事、飲み水、結婚は別々に行う場合が多い。だが、このような細分化は比較的新しい事態であり、共通の母集団を持ったことが記憶されている［Taylor 1840］。

バラモンは、旧ビクランプル郡を含む第IV地域に集中する。なお、シュードラsudra（奴隷）も第IV地域に極度の集中を示し、バラモンや郷紳層との密接な関わりを示す。

多くのカーストの分布は特定のタナへの集中している。D県（全13タナ）の43カースト中、10カーストは上位３タナに80％以上が集中するし、同じく上位３タナに27カーストが50％以上の集中を示す。逆に、ほぼ全域に分布する10 ～ 11のカーストもある。彼らは幅広い範囲の住民にサービスを提供する職業に従事する場合が多い。

D県の土地制度を見よう。所有権の規模分布について述べれば、100エーカー未満、地租額50ルピー未満の零細地所が9340（全体の87％）に上り、10000エーカー以上、地租額10000ルピーをこえる地所は僅か３地所のみであり、圧倒的に零細地所が多い。これを地域類型から見ると、第IV地域では、52％の村（面積では65％）で１村内に13以上の地所が存在し、第III地域の18％（30％）、第I地域の12％（27％）、第II地域の9％（15％）と比べて、飛び抜けて地所が細分化されている。これは、第IV地域に旧ビクランプル郡が含まれ、零細な郷紳が多数居住していることと非常に整合的な事実である。他地域では、平均すると、１つの村が１つの地所に覆われる場合と複数の地所が存在する場合とが１対２の割合で混在する。

借地権は、D県では耕地面積の40％に及ぶが、B県、F県をかなり下回る。借地権には、所有権者から直接借地する上位借地権と借地権者の下に創設された下位借地権がある。上位借地権の内69％は下位借地に出され、場所によっては９層にも及ぶ借地権の重層が見られた。第IV地域と第II地域の市街地域に借地権数が多く、第II地域の森林地帯、第III地域の新生中洲では少ない。借地権者は17％を直営し、賃労働者や刈分小作人に耕作させ、残りは農民に小作させた。小作料（地代）は、所有者から小作する場合は平均2–4ルピー／エーカーだが、借地権者から小作する場合は3–14ルピー／エーカーとなり、かなり割高であった。D

県では借地権者は主に在村郷紳であり、B県に広範に存在した農民的借地権者は殆どいないことに注意すべきである。

小作権についてD県の特徴を見よう。全耕地の77%が農民小作地であり、そこでは9割以上の農民は占有権・定住権を得ており、小作権は安定していた。従って、D県ではBoseらが主張するように、小農生産が中心を成したことになる。だが、地主直営地では刈分小作は一時小作とされ、占有権が発生することはない。さらに注目しなくてはならないのは、地籍確定事業報告書が刈分小作の急増に度々言及しており、D県全体で刈分小作地は200平方マイル（全耕地の10%）を上回ると推定されたことである。ジュート耕作が拡大するなかで、金貸しが農民に融資を与え、滞納した農民から小作権を買収して定量刈分又小作人（従属農民）とすることにより法の保護を外し、高額地代を実現した。安定した小作地であった土地においても、隠れ刈分小作が増大していたのである。

最後に、D県の農民負債状況を一瞥する。地籍確定事業において詳しい農民負債調査が行われ、47%の農民世帯が総額4700万ルピーの負債を負うことが明らかになった。平均金利45%と仮定すると、年間利子は2142万ルピーに達する。これは、総農業生産額の20%、地代総額の5.5倍に達し、平均的農民の年収の25%が負債返済として金貸しの手元に渡っていたことになる。東ベンガル農民が深刻な負債に巻き込まれるのは1929年の大不況以降であるという通説は再検討されねばならない。D県の農民はこうして、刈分制度と高利貸しの結合により窮地に追い込まれつつあった。この事態は、ジュート耕作の拡大と、1885年のベンガル小作権法により農地が担保としての価値を得たこととにより急速に進行したと考えられる。

4　農業社会の地域類型を変容させる諸要因―開発と人口移動―

地域類型は決して不変ではなく、変容する。そのメカニズムとして、最も顕著なケースは東ベンガルにおけるジュート栽培の展開（ジュート経済の成立）である。ジュート生産が拡大していく中で、鉄道や蒸気汽船が導入され、栽培農家のみならず、原料ジュートの収穫後処理、圧搾、流通などで多くの労働需要が生まれ、また、その増大した所得があらたな食糧需要を生み、地域経済が活性化する。外部からの多数の労働者が流入し、その結果、地域の人口構成が急速に変化し、人口重心が移動

したのである。

その他にも、例えば19世紀後半のヒマラヤ山麓地帯の茶園の急拡大はサンタルsanthal、ムンダmundaなどの労働力の大量移入を引き起こし、やがて、彼らが定住し農耕を開始すると社会集団構成・地域社会・地域経済に顕著な変化をもたらしたことは多くの研究が明らかにしている。北部ベンガルのラージバンシ多住地帯では、焼畑農業から、役牛と犂を用いる水田稲作農業への移行により大きな社会変容が生じた［Taniguchi 1994］。

このように、地域類型は、生態学的・政治的・経済的・社会的そして人口学的な変動に応じて、変化する。

5　まとめ

本稿で示したように、ベンガル平野における社会集団の分布には大きな偏りがあり、それはカースト的集団構成論だけでは位置付けることが困難である。また、ベンガル州の県やタナの地域類型は多様であり、歴史分析や政治経済分析においては、そのことが十分に配慮されねばならない。

人口周密なベンガルのガンジス・デルタ地帯においては、開発が進むと農民世帯の土地保有規模が小さな幅の中に収まるのは当然のことであり、このことをもってベンガル農業の基本は小農経済であるとすると、農民層内部に小農経済とは異質な経営構造が並存することを見落とすことになってしまう。Boseの農村社会構造の諸類型やDattaの小農経済論は、農家経営形態を十分に視野に収めていないために、この誤りに陥っている。並存する異質な経営構造とは、富農や郷紳などの地主手作り経営と零細・過小農経営との補完的構造であり、それこそが今日に続くベンガル農村の貧困問題を生みだす主要メカニズムの一つをなしてきたのである［Taniguchi 1987］。

註

1　新たな歴史像に向けてのより長期的な考察は、［谷口晉吉 2013］において行ったので、ご参照願えれば幸いである。

2　この論争の論点と主要な研究については、［谷口晉吉 2003］を参照されたい。

参照文献

Bose, Sugata, 1986, *Agrarian Bengal: Economy, Social Structure and Politics, 1919-1947*, Cambridge: Cmbridge University Press.

Datta, Rajat, 2000, *Society, Economy and the Market: Commercialization in Rural Bengal c. 1760-1800*, New Delhi: Manohar.

Raukin, I. T., 1901, "Report on the origin and rank &c. of Sub Castes in Bengal " , in *Risley Collection*, Vol. 1, India Office Records, IOR MSS Eur 295/1, pp. 371-392.

Ray, Ratnalekha, 1979, *Change in Bengal Agrarian Society, c. 1760-1850,* New Delhi: Manohar.

Taniguchi, S., 1987, *Society and Economy of a Rice-producing Village in Northern Bangladesh,* Tokyo: Institute For The Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.

Taniguchi, S., 1994, "The Rajbangshi community and the changing structure of land tenure in the Koch Bihar princely state" , in S.Taniguchi et al. (eds.), *Economic Changes and Social Transformation in Modern and Contemporary South Asia,* Tokyo: Hitotsubashi University, pp. 57-92.

谷口晉吉、2002-2005、「植民地支配期ベンガル農業社会の地域構造（I）、（II）、（III-1）、（III-2）」、『一橋大学研究年報　経済学研究』、44-46。

谷口晉吉、2003、「18~20世紀ベンガルの富農層研究についての覚え書き」、『遡河』、14、22-29頁。

谷口晉吉、2013、「ベンガルにおける部族とカーストをめぐって―一つの歴史的試論―」、『東京外国語大学論集』、86、175–204頁。

Taylor, James, 1840, *A, Sketch of the Geography and Statisitics of Dacca*, Vol. I., Calcutta: Mann, Military Orphan Press.